

23 再構築の定義とその種類

再構築 (reconstruction) とは、移動を受けた構成素が移動の元位置もしくは移動の中間位置で解釈されることを指す。この現象は束縛や作用域の解釈を通して観察される。例えば、(1) は移動要素に含まれる再帰代名詞が主語位置の先行詞から束縛される解釈を持つ。

- (1) Which picture of himself_i did John_i like?

再帰代名詞は先行詞から局的に束縛されなければならない。しかし、(1) では移動した wh 句に含まれる再帰代名詞が先行詞から c 統御されておらず、表層の位置のままで束縛は不可能である。(1) の束縛の解釈は、wh 句が移動の元位置で解釈され、その位置で再帰代名詞が先行詞から束縛されることで得られると考えられる。

再構築は本来、移動の痕跡理論の枠組みのもと、移動要素を LF 部門で痕跡の位置に戻す操作を指していた。(2) は移動の痕跡理論における再構築を表している。(2a) は移動が適用された構造を、(2b) は LF 部門で wh 演算子以外の要素を再構築した構造を示している。

- (2) Which picture of himself_i did John_i like?

- a. S 構造: [which picture of himself_i]_j did John like t_j
b. LF: [which x] did John_i like [x picture of himself_i]

しかし、移動のコピー理論が提唱されると、再構築は移動要素を低い位置に戻す操作ではなく、移動で残された低い位置のコピーを解釈することを指すようになった。つまり、下図の各コピーのうち削除されずに残った部分が解釈される。

- (3) [which picture of himself_i] did John_i like [which picture of himself_i]

(3) では、移動の元位置に残る wh 句のコピーのうち wh 演算子以外の要素が解釈される。その結果、元位置のコピーに含まれる再帰代名詞が先行詞から束縛され、束縛の解釈を得ることができる。このように、移動に関する理論の変遷のもと、再構築の指す内容は変化してきた。

再構築現象には、その下位分類として**部分的再構築 (partial reconstruction)** と**全面的再構築 (total reconstruction)** が存在する。部分的再構築とは、移動要素の一部が移動の元位置または中間位置で解釈されることを指す。例えば、(1) の文では(3) に示すように、wh 語以外の要素が wh 移動の元位置で解釈されるが、wh 語は疑問演算子として移動先の位置で解釈される。

一方、全面的再構築は、移動要素全体が移動の元位置または中間位置で解釈さ

れることを指す。本項では、日本語のかき混ぜを例に挙げて説明する。日本語では、wh句が疑問の補文標識「か」を主要部とする節内に生起しなければならない。したがって、wh句が最初から「か」の疑問節の外に生起する(4a)は非文法的である。しかし、wh句がかき混ぜによって「か」の疑問節から抜き出された(4b)は文法的である。

(4) a. *誰が [ジョンがメアリーを叩いたのか] 知りたがっている。

b. ?[誰を]; ジョンが [メアリーが t_i 叩いたのか] 知りたがっている。

(4b) が成立するためには、疑問演算子を含めたwh句全体が移動の元位置で解釈されなければならない。このように、移動の種類によってどの要素を再構築するのかは異なっている。

日本語のかき混ぜのように移動要素全体が移動の元位置で解釈される現象は、英語のA移動でも観察される。(5)は主語のa manが特定の人物を指す解釈と特定の人物を指さない解釈を持つ。特定的解釈は不定名詞句a manが内包動詞seemの作用域外で解釈される場合に得られ、非特定的解釈は不定名詞句が内包動詞の作用域内で解釈される場合に得られる。

(5) [A man]; seems t_i to play baseball.

(\exists > seem, seem > \exists)

この文では、存在量化子を含めた移動要素全体を移動の元位置で解釈することが可能である。この解釈は、(4)と同様に全面的再構築によって得られていると考えられる。

一方、A移動は再構築を許さないという意見も存在する。(6)は、全称量化子を含む要素がA移動する例である。

(6) Everyone seems not to be there yet.

(\forall > not, *not > \forall)

この文では、主語の全称量化表現が移動前の位置で否定辞より低い作用域をとる解釈が許されず、A移動における再構築の制限を示している。また、Fox (1999)は、A移動が随意的にコピーを残すと提案し、(5)と(6)の例を説明しようと試みている。どの移動にどのような再構築が許されるかについては今後さらなる研究が必要である。

(齋藤 章吾)